

「特別な教科 道徳」実践報告

「自然に対する畏敬の念」を抱いたり、「人間の力を越えた存在」を感じながら自らの生き方を考える道徳授業の実践

永原益穂
鳥取大学附属中学校

E-mail: nagaharam@fuzoku.tottori-u.ac.jp

1. はじめに

教育基本法第2条は、教育の目標を掲げているものであるが、その第1項に「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」と示されている。そして、学習指導要領においては、「学校における道徳教育は、学校のあらゆる教育活動を通じて行われるものである。とりわけ、道徳の時間が道徳教育の要として有効に機能することが不可欠である。」とされている。

「特別な教科 道徳」に示されている内容項目は、その全てが道徳科の要であり、道徳教育における学習の基本となるものである。内容項目は、「A 主として自分自身に関すること」、「B 主として人との関わりに関すること」、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」、「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の4観点である。

これまでも、道徳の授業において多くの実践や研究が進められてきた。しかし、この4つ観点の中でも、特にDの内容項目を扱う授業実践や研究例はAからCの内容項目と比べても非常に少ない。少ない理由として、授業者自身が題材に登場する人物と同じような体験をあまりしていないことがあげられる。日々の学校業務に携わって仕事をしている教師にとって、自然の雄大さ、優美さ、偉大さなどを感じて、己れ自身と向き合う主人公ほど自然に接している時間は少ないといえる。実際に道徳の授業前の事前検討会でも、このAからCの内容項目に比べてDの内容項目を扱う授業はやりにくいという声がある。そこで、ぜひこのDの内容項目を扱う授業を対象とし、授業展開においていかに「やりくり」をして学びの質を高めることができるかを実践した。

この項目の中には、「美しいものや気高いものに感動する心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深めること」がある。畏敬の意味については、『畏敬』とは、『畏れる』という意味での畏怖という面と、『敬う』という意味での尊敬、尊重という面が含まれている。(学習指導要領)そして、偉大なる自然を感じ取りながら自己の存在をみつめるときに、「自然の中で生かされていることを自覚すること」ができれば、自分自身の存在の貴さや気高さだけでなく、自然への感謝の気持ちが芽生えてくる。さらに、「生かされている」「周囲の人によって支えられている」ことを実感することができれば、日々接している周囲の人々、特に家族に対して「感謝」の思いも湧いてくるのではないかと考える。

2. 授業構成

本校では、日本文教出版「あすを生きる」を教科書として使用している。日々の授業においては、A～Dの内容項目を万遍なく実践している。私自身は、ワークシートは作っておらず、教科書準拠ノートがあるので、このノートを使って主発問をチェックしながらも、必要であるならば主発問を替えながら、授業展開を図っている。

2.1 導入について

授業の導入については、教科書を開く前に本時の授業につながる導入発問を行う。あるいは、写真やイラストなどを提示する場合もある。また、登場人物がたくさん出てきてどの視点で教材を捉えるのかを考えさせたい場合には、物語の大まかなあらすじを伝えたりすることもある。「町内会デビュー」の授業の時は、「ボランティアの経験はありますか。」などのクラスアンケートを事前にとり、

その結果を発表することもした。一般的なアンケートではなく、自分たちのクラスの結果なので、興味をもってそのデータをじっくりと見ていた。普通の導入は3分程度であるが、一度だけ導入に15分も使ったことがある。「ゴリラのまねをした彼女を好きになった」の授業である。ズバリ勝負の導入発問である「あなたには今好きな人はいますか。また、その人のどういうところが好きですか。」推薦された男子、女子が順に恥ずかしながら答えていったことを思い出す。人が人を好きになるのは、様々な理由があると思っていたが、「優しい所」、「かわいい所」など次から次に反応があり、気がついたら時間が経過してしまっていた。「先生、今日は授業をしないんですか。」との指摘にふと我に返り、教科書に戻った。授業後の記述では、「人を好きになるって・・・理由とかじゃなく何かピンと感じるものがあるのかな」とか、次の日の生活ノートでは、「今日の道德の授業は楽しかったです。〇〇君って深く考えているなって思いました。」などの記述もあり、「道德の授業が楽しい」というコメントは、授業者として嬉しいものである。

2.2 展開における「やりくり」

展開での発問は一つだけ。そのため、いきなり主発問となる。なぜ、発問を一つにするかであるが、できるだけクラス33人全員にしゃべらせたい、同じ発問に対して全員がどのように考えていて、さらにクラスに向けてそれぞれが自分の考えや意見をどのように述べるかを知りたい、との授業者の思いからである。発した発問に対して、個人でじっくり考える時間、周囲や班の仲間と交流する時間、クラス全体で交流する時間を作る。そして、最後にまた個である自分に戻る時間、この流れの中で「やりくり」をいかに引き出すかが重要である。

また、この展開においては、予想される生徒の反応をある程度準備しておくことも大切かもしれないが、もともと限定した解は存在せず、広がりを持つ問のよさを授業者は十分に把握して授業展開を図る必要がある。

2.3 終末、まとめについて

教師がまとめを行うことは必ずしも必要ない。多様な価値に気づき、友達の意見を聞いてどれだけ

自分の腑に落ちたかを授業の感想や振り返りで確認したいと考える。ただ、私自身の考えを伝える場合もあったり、私自身の経験談を語る場合もある。経験談は、実際の話なので説得力がある。今、生徒の前に立って授業を展開している教師が、過去には苦い経験をし、人間の弱さを克服して努力していることが分かれば、教材そのものから学ぶことに加えて目の前の一人の人間から学ぶこともできる。まさに、生きた教材であるといえよう。

ここで、これまでの道德の授業の中で一つエピソードを紹介する。感謝の思いを伝えるような道德の授業であったと記憶しているが、「私自身は意識をして一日一回『ありがとう』という言葉を家族全員に言うようにしている。」と話したことがある。この授業のまとめで言った私の言葉を覚えていて日々の生活で、実際に実践をした生徒がいたのである。ある人権作文の中で分かったことであるが、「家族の大切さは分かるが、母親とけんかをしてしまい、・・・ここ最近、口を聞いていない。」というような内容であった。その後、道德の授業を思い出し、どんな時も支えてくれている母親へ感謝の気持ちが湧き「ありがとう」の言葉を伝えたという話である。母との関係は少しずつよくなり、私の反抗期はそのあたりで終わったような気がする。後の回顧録は語っている。思春期真っただ中にいる中学生であっても、道德で学んだことを実践してくれることもあるのだと改めて感じた。

3. 授業実践

3.1 教材「風に立つライオン」(5月)

教科書の中で、「D自然」を扱った研究対象になる題材は2本であった。1本目は、「風に立つライオン」である。この資料は、医師である主人公が3年前に日本に恋人を残し、ケニアの村々で巡回医療を行うという内容である。恋人への謝罪の気持ちがありながらも、医療行為を続ける中でアフリカの大自然に感動し、偉大な自然の中で病に向き合うことで、自分の決めた決断をより強固なものとして捉えていくようになる。そして、自らのこれからの存在について「風に向かって立つライオンでありたい」と考えるのである。主発問は、『僕』はなぜ、『風に向かって立つライオンでありたい』と考えたのだろうである。

この題材は、別の教科書では、「A-4 希望と勇気、克己と強い意志」の内容項目で授業されることが多いようである。教材・題材・内容が同じでも、授業者が何をねらいとして、何を生徒に伝えたいかが明確であるならば、別の内容項目でも授業として成立すると考える。

(授業の感想)

- ・今日の授業で、自分も意志をもった強い人になりたいと思いました。また、どんな時も堂々したいです。
- ・最後の「おめでとう、さようなら」にたくさんの思いが入っていることが分かりました。何かを選ぶなら何かを捨てなければならないということが分かったので今後には生かしていきます。
- ・風に立つライオンのように、諦めず、いろいろなことに闘っていきたくと思った。逆境もチャンスと思えるようにしたいと思った。
- ・人は必ずどこかで辛いと感じることがあると思いますが、そんな時は、「風に立つライオン」のように強い自分になって立ち向かおうと思いました。
- ・「人は自分以外の誰かの役に立つために生まれてきた」というメッセージが心に残りました。

自然と向き合いながら自らの生き方について思いを巡らす主人公に自分自身を重ねながら(自我関与させながら)考えることができたのではないかと思う。一般的にいわれている4つの対話のうち1つめである教材との対話がなされたといえる。

ここで、4つの対話とは、1:教材との対話 2:教師との対話 3:生徒同士の対話 4:自己内対話のことである。1つ目の教材との対話であるが、どの教材、題材を扱う時も自我関与させることが重要である。主人公の気持ちを考えるだけでなく、自らを主人公に重ね合わせてしっかりと考え、教材と対話をさせたい。2つ目の教師との対話については、素直な気持ちを述べることでできる空気を作って、しっかりと教師(授業者)が生徒の発言を受け止める必要がある。そして、単に意見を板書するだけでなく、出た意見に対して「それってどういうこと?」「何で、そう思ったの?」など聞き返してみるとさらにより深く考えることができる。これは、追発問、切り返し発問などといわれるものである。3つ目の

生徒同士の対話については、しっかり対話するためには、まずは自分の意見を持つことが大切である。自分の意見を持つためには、個人で考える時間を十分に確保する必要がある。4つめの自己内対話については、これまでの3つの対話を通してもう一度自分と対話することである。友達の見聞を聞くことで、実に多様な考えがあることに気づくのである。当然、答えは一つ、という発問では、生徒から様々な意見や考えを引き出せず、より多角的・多面的な考え方にも発展することができない。「やりくり」の場面を意識して広がりのある主発問を教師は準備する必要がある。また、授業展開によっては、準備していたその主発問を生徒のほうが出してくる場合も大いに考えられる。逆に、そのような授業展開のほうが自然な流れでよい。

タイトルにある『「自然に対する畏敬の念」を抱いたり、』に対しては、全くといっていいほど学びの成果として表れてこなかった。自然(動物)を扱った教材ではあるが、畏敬の念を抱かせるのは今回の教材では、困難であった。注意すべきは、新聞・ニュースなどで報じられる台風、土砂災害、津波等の自然が有して起こす(人間が想像できないような)その現象を畏敬とは捉えたくないのである。自然の雄大さや優雅さ、優美さなどを疑似的に体感して、自分自身の殻と自然との対峙によりその上で、自分を、自分の存在をみつめ直してほしいと考えている。

今回の授業を行ったのは5月であるが、主発問に対しては各個人がじっくりと考えてノートに記述し、発表もしていた。しかし、授業の中における生徒同士の対話に対しては、とても消極的であり、さらに自己内対話ができただろうかについては道徳ノートから感じることはできなかった。「やりくり」の場面を意図的に展開したつもりであったが、個人の中だけで思考が終わってしまったのである。この原因を探してみたい。私自身は、今年度初めて附属中学校に赴任(3年生担任)し、私のもう一つの担当教科は数学であるが、数学の授業については、よく反応し、教え合い学習もとても活発である。それがなぜか、道徳の授業でのペア活動や班での活動になると、驚くほど無言になってしまい、不思議な感覚を覚えた。敢えて厳しく言えば、1,2年生のときの道徳の授業の土壌が育ってなく、中学校3年生に進級して一から道徳の授業を作っ

ていく必要性があり、ここからが「道徳の授業のスタート」だと感じた次第である。

3.2 教材「風景開眼」(12月)

もう一つ目の授業は、東山魁夷(1908～1999)の「風景開眼」である。東山魁夷は、日本を代表する画家である。内容項目「D-(21) 感動、畏敬の念」に該当し、「筆者の『自然の神秘に感動し、人間の力を超えたものへの畏敬の念』を感じ、自分自身をみつめる。」という本時目標である。授業では、教科書の後半の記述に注目して展開した。「人生の旅の中には、いくつかの岐路がある。中学校を卒業する時に画家になる決心をしたこと、しかも、日本画家になる道を選んだのも、一つの大きな岐路であり、戦後、風景画家としての道を歩くようになったのも一つの岐路である。その両者とも私自身の意志よりも、もっと大きな他力によって動かされていると考えないではいられない。たしかに私は生きているというよりも生かされているのであり、日本画家にされ、風景画家にされたとも云える。その力を何と呼ぶべきか、私にはわからないが・・・」

中心発問は、『「私は、生きているというよりも生かされている』という言葉には、どんな思いが込められているのだろうか。」とした。

この発問に対する生徒の話し合う様子や意見、考えを紹介する。班での話し合いも自然に活発になってきた(図1, 図2)。形として班隊形にしなくてもそれぞれの班で自分の意見を述べ、さらに聞いた班員の考えをノートに書くという授業スタイルができてきたように思う。人が人に話したくなるのは、自分の意見や考えを持ち、仲間に伝えたいとの思いがあるからであろう。また、安心して聞いてくれる仲間の存在があることも必要である。個人思考から班の話し合いへ、そしてクラス全体で共有する場面である。「やりくり」の場面の一部である。



図1 班で話し合いをする様子



図2 班で話し合いをする様子

- ・自分の心とか感情が背中を押してくれた。
- ・決められた自分の道を必死に進んでいく。
- ・自分が生まれ持った使命を果たしていく。
- ・自分を支えてくれた人の助け(誰かの思い)があるからこそ今の自分がいる。
- ・自分の命があることに感謝。
- ・過去の経験(失敗)に生かされて自分の運命を感じる。
- ・周りの人、物から感動がある。
- ・自然に対する強いリスペクトと感謝。
- ・風景や世界に生かされている。
- ・大きな自然の摂理の中で、小さな自分が生かされている。
- ・己の意志だけでなく神が自分の生きる道を与えてくれた(天職)。
- ・生まれたいから、生まれたわけではない。
- ・もっと大きな他の力によって動かされている。

班での話し合いも活発であると述べたが、クラスでの意見交換も活発である。



図3 様々な意見を集約した板書

図3は様々な意見や考えをまとめた板書である。生徒Aが、「生まれたいから、生まれたわけではない。」と言えば、生徒Bが、「それってどういう意味?」生徒Cが「え?どういうこと?」と切り返しをするのである。本来であるならば、授業者がすべき切り返し発問をクラスの仲間がつつこむのであ

る。さらに、別の生徒達が意見を言いましたので、流れている時間を一回止めて、クラス全体での話し合い（議論）とした。この議論する様子は、実に楽しい時間帯である。授業者はこの時、全体をコントロールするだけでよい。私自身の学級経営目標として、「安心して自分を出し、仲間と協力して各自が自己実現しよう。」と掲げている。この「安心して自分を出し」の部分はこの道徳の授業を通して、学級経営目標を実現することができているのではないかと考える。話し合いも活発であるが、時には、脱線してしまう（議論すべきテーマがすり替わる）場合もある。その時は、軌道修正することもあるが、概ねクラスみんなでお互いに意見をぶつけながらすすめることができている。

「道徳科のねらいに迫るために、自分の考えを基に、討論したり書いたりするなどの表現する機会を充実することが大切である。（学習指導要領）」

「考え、議論する道徳」について、まず、「考える」とは、自分が主体的に考え（自分のこととして考え、自我関与させ）ることである。そして、「議論する」ことを通して、多様な考え方と交流して自らの持つ心の感じ方を知り、自らの考えがより明確になるのである。「議論する」と聞くと、「論理を立て、相手をやっつける」と捉える場合もあるかもしれないが、そうではない。議論する中で、「そんな考えがあるのか。」と気づいたり、改めて自分の考えを客観視することもできるのである。

教科書指導書解説には、授業者への授業そのものの評価の観点があり、自分自身の授業を振り返るいい視点をもらったのが、次の内容である。①「筆者が見た『輝く生命の姿』をとおして、自然の神秘に感動し、人間の力を超えたものへの畏敬の念について深く考えようとしている様子があったか。」②「（授業者の）発問により、（生徒が）筆者の感動に共感しながら自然に対する畏敬の念を抱き、謙虚な気持ちで生きていこうとする発言や記述を（授業者が）引き出すことができたか。」

生徒の授業の感想記述を紹介する（図4）。生徒によっては、内容が難しかったとの感想を書いている。確かに普段、自然について、自然への畏怖について考えることもないであろう。ここが、道徳の時間のよさである。他の教科では、まず考えることがない時間である。そして、生徒にとって

自分は生まれたからには、何かしらの使命があると思うので、しっかり果たしていきたいと思います。

難しい内容だったなと思います。生きていくという方も生かされているというのは、与えられた道を歩んでいく。過去から学び、進んでいくということのかなと思います。

神の力を感じました。自分が今生きているのはどうい意味がある、奇跡だということが分かりました。

自分が何によって生かされているのか、そういうことは今まで考えたこともありませんでした。確かに、自分の運命とかそういうものはもう決まっています、その道を自分で見つけられるといいなと思います。

疲れているときや何か悩んでいるときに、自然の風景を見ると、何だかスッキリするような気持ちになります。これは人の言葉で説明しきれないから、自然の力ってすごいなと思います。
今回、話が難しくて理解するのが大変でした。自然は自分も考えているよりもスケールが大きいなと思いました。

自分が生かされているというのは、私も感じました。ありがとうございます。これが4の到達点にしたいなと思いました。

東日本大震災のとき、他は全て流されているのに1本の松だけ残りました。この光景に、僕は本当に人間ならざるものが存在するのだと思いました。

図4 生徒の授業の感想

実際に自分の使命感を感じて精一杯生きている、生きた人物との出会いは貴いものである。ただ、今回はその人物を自然（動物も含めて）を感じ、それを超える何かしらの存在を感じ、自分自身の生き方に結びつける人物を紹介したかったのである。

この教材は、創作された逸話ではない。東山魁夷という実際に存在した人物の回顧録である。ちなみに、前半に扱った「風に立つライオン」の主人公のモデルは、日本の医師、柴田紘一郎（1940 -）として知られている。

全日本中学校道徳教育研究大会鳥取大会での大会紀要の一部にもあるが、『人間としての生き方を考える』際、何より参考になるのが先人の生き方である。私たちの前には、幾千幾万人の先人たちがその時代時代を精一杯生き抜いている。特に、偉人として後世まで語り継がれているような人には学ぶべき点がたくさんある。」のである。

人物に焦点を当てた場合、資料作りとしては生い立ちから亡くなるまでを綴るのが妥当であろう。ただ、道徳の教科書ということで全文の記述のうちの一部を抜粋したものになっている。

研究をすすめていく中で、「風景開眼」という教材について詳しく調べてみると、道徳の教科書には載っていない省略された部分があることが分かった。幼小期に病気がちで苦しい思いをした経験や父親の仕事の倒産や家族との葛藤などがあり、そのことが逆に自らの生き方が自然へと向けられたのではないかと推測されるのである。省略された中に「少年期の私は、何事をも疑ってみる時期があった。あらゆる存在に対する不信の思いに耐えられない自己を持てあましていたこともある。しかし、ある諦念ともいうものが、私の中に根ざしてきて、私の支えとなったのだと思う。」との記述がある。この「諦念」という考え方が、東山魁夷という一人の人物を象徴しているのではないかと。もし、東山魁夷という人物そのものを出会わせたかったら、この省略された部分も扱うべきである。東山の生まれてからの生い立ちを生徒に伝えることができなければ、東山がなぜ「自然」へと心惹かれていったかを暗に示すことができたかもしれない。

3.3 題材「岡潔のたどり着いた境地」

岡潔(1901-1978)は日本が誇る数学者であり、多変数関数論の分野で世界的な難問を解決し、その業績により昭和28年文化勲章を受章した人物である。晩年は、日本の情緒や情操教育の大切さを語り、心についても言及している。自作資料を作成し、授業展開することで、岡潔の生きざまに少しだけはあるが、触れることができた。授業後半には、「NHKアーカイブあの人に会いたい～岡潔～」で実際の生の岡潔のメッセージを生徒に伝えた。そのメッセージの一部ではあるが紹介する。「日本人は、自然とか人の世とかを自分の心の中にあると思っているらしい。自然や人の世が喜ぶと自分が非常に嬉しいというらしい。つまり、日本人はものを心の中に入れて、そしてその自分の心を見るっていうふうなことが非常に上手なのに、今の人はどうも内を見る眼というのがあまり開いていないように思う。日本人の本来の心を思い出してもらいたいな。」

主発問は、『心を透明にしていく』ということは、具体的にはどんなことだろうか。」とした。自然を見てその情緒を感じ取り、その上で自分の心を見つめることが大切であると思い、この主発問にした。単に風景や自然を見て感動し、「きれいだなあ」「素晴らしい景色だな」と思う気持ちがあるのだが、ここで終わると道徳にならない。さらに自分の心を見つめなおすのである。この主発問に対する生徒の回答は次の通りである。

- ・頭の中は、いつもそのことを考える。
- ・悩みなどの負の面(濁り)を一つずつ解決する。
- ・今必要なこと以外全て忘れる。
- ・目の前にあることに向き合う。
- ・一つのことには没頭する。
- ・心が濁った時にもう一度初めから考える。
- ・真実を知ろうとする。
- ・世の中の流れに影響されずに自分の考えをしつかり持つ。
- ・既に証明されていることにとらわれず、自分なりに一から考え直す。
- ・思い込みを否定してみること。
- ・欲を捨てて純粋に楽しむ。
- ・真実を知ろうとすること。
- ・煩惱を絶つ。それによって集中できる。

授業の感想は次の通りである。

- ・ただ物事を解決するために「考える」というよりは、自分の心と向き合って自分の意志を見つけそれを貫き通すことが大切だと思いました。
- ・こまめに心の汚れをとって、清潔を保つことで心の煩惱を取り除くことが大切だと思いました。常に自分の行動を振り返り、反省して次にいかすことでよりよい自分をつくることができるということが分かりました。
- ・「心を透明にすることがどういうことか」と質問されたときに、ぱっと言葉が浮かびませんでした。しかし、班の人やクラスの人の意見を聞いたら、「心を透明にする」ということがどういうことか何となく分かりました。
- ・「心」というのは人が生んだ概念で、その概念をどうやって成長させるかを考えるのが大切なのかと思いました。

- ・とても難しい内容でした。「心を透明」っていうのは、何を表したかったのか分かりません。でも岡先生は、「心を透明」にして数学に取り組んでいました。心があるのに透明って不思議な感じですね。
- ・物事を一旦心の中に入れ、考えるということに感動しました。岡先生は、数学者でありながら、人の考えの在り方まで人に影響を与えていて、本当に素晴らしい人間だと思いました。また、そのような人間から影響を受けることができよかったです。
- ・数学は心の中で行う魂の学問であると思いました。心を磨くということは、自分らしく前へ進むということにつながるかどうかは分かりませんが、ある一つのことに執念を燃やしていきたいです。

教師の語りとしては、「反省により心の曇りを取り除くと心が透明になる」ことを体験談として話した。行為だけでなく、思ったことさえも反省するのである。心が透明になると温かい光のようなものが入ってくる。なんともいえない心地よさである。しかし、同時にマイナス的な波動の悪いものもかかってくることもある。だから、反省行は永遠に行っていかなければならない。心とは、実に不思議なものである。一生かかっても解き明かすことはできないであろう。

4. 道徳の授業準備として

50分の道徳の授業をする上で、授業者は、教材・題材について、前もって徹底的に準備を行う必要がある。扱いたい内容項目は何か、本時目標は何にするのか、生徒にとっての「ねらい」は何にするのか、そして主発問を何にするのかである。忙しいとは思いますが、板書計画まで準備したほうがよい。指導案も準備すればよいが、大変である。週1回の道徳の授業を実りあるものにするためには、板書計画(手書きでよい)を準備することが最低限の必要なことであると思う。

そして、予備資料(イラスト、写真、映像、音楽)などを学年で共有して出来るだけ、どのクラスも同様な授業が行われるようにしたい。さらに余裕があれば、その教材・題材の元になっているものが何から引用されているか調べておきたい。調べた

ことを全て授業展開で扱う必要はないが、授業者にとって、授業を行う上でこれは大切なことである。

5. まとめと今後の課題

これまで行ってきた授業の中から、内容項目、価値項目を特化して論じてみた。研究のテーマに沿った授業を中心に授業の様子を紹介した。生徒の生き生きとした活動の様子が伝わったであろうか。1回の授業の時間軸の中では、まず個人で考えさせ、その後は教師対生徒、生徒対生徒で語り合う場面、そして最後にもう一度生徒個人に焦点を当てるように意識をして授業展開を図った。これが、本校の「やりくり」を活性化させるための思考である。学習の思考過程に個と集団のやりとりを意識している。個人思考、その後集団での思考、そしてもう一度個の思考へと展開を図るのである。

「考え、議論する道徳」とは理想であるが、やはりこれが実現されるためには、自分の意見や考えを自由に述べることのできるための根底に学級経営が土台になくなくてはならない。自分の素直な気持ちとありのままぶつけるだけでも授業者としては嬉しいものである。道徳の授業ならではのものであろう。逆に、自分の意見ではなく明らかに演技をして上辺だけ、口先だけで言う態度をみると、悲しくなる。生徒に対しての思いではない。自分自身の学級経営のいたらなさを痛感するのである。そして、秋から冬になると学級も出来上がる。これは、道徳の授業というよりも行事を通して生徒同士の結びつきが生まれ、道徳の授業でもお互いに意見を活発に交換できるようになったと考える。

やや脱線してしまうが、行事の中で合唱コンクールというものがある。どのクラスでも賞を目指して一生懸命歌い、練習に励むであろう。そして、時には男女がぶつかり合って、全然歌わない男子を女子がうるさく言うことなどが起きる。我がクラス3年B組は、男女がぶつかることはなかった。これも予想していた。なぜならば、運動会練習で既に男女がぶつかっていたからである。賞を獲得することにあまりこだわりのないが、練習にはこだわりがある。自分のためクラスのためにしっかり活動できるかである。結果が悔しいものになれば、涙を流しクラス全員でその思いを共有すればよいと思う。

なぜ、ここまで行事について触れたのかというと、

「道徳の授業の時間だけで道徳の理想的な授業展開はできない」ことが言いたいからである。他の教科での取り組みを通したり、そして様々な学校行事を通したりして生徒は成長する。個人だけでなく、集団としても成長する。

道徳の授業の話に戻るが、時間の最後は、もう一度自己に戻らなければならない。価値項目に対する考えを多角的・多面的に捉えた数多い意見を聞いた後、自己をもう一度見つめ直して道徳ノート、ワークシートにしっかりと感想をかく。そして、書いた文章をもう一度みつめることで、しっかりと自己内対話をすることができるのではなかろうか。「これが理想の道徳の授業だ」と納得できた授業は一度もない。まだまだ、今後もテーマを追求しつつよりよい授業を展開していきたいと考える。

参考文献

- 文部科学省 教育基本法第2条(2006)
文部科学省 中学校学習指導要領解説
特別の教科 道徳編(2017)
鳥取県教育委員会 平成30年度鳥取県学校教育
のめざすもの(2018)
全日本道徳教育研究大会鳥取大会実行委員会 第
53回大会紀要「人間としての生き方について自ら
の考えを深める道徳教育の在り方」(2019)
東山魁夷の『風景開眼』(『風景との巡り合い』新
潮社)(2012)
NHKアーカイブ「あの人に会いたい～岡潔～」
(2009)